京都新聞 2009 年 4 月 25 日

命ときめく日に

第4部 つながりと医療編

制度歪み「強いられる在宅」

❻ 患者不在 増える費用負担
診療医、国策に疑問

往診する患者の名を張った二色のマグネット。診察室の予定表の上であっちこっちへ動かす。外来診療の合間を縫っての往診。「やり繰りはオセロのよう。二十人を超えるとしんどい」

京都市山科区の開業医、戎井浩二さん（47）＝写真左＝が深く息を吐いた。

勤務医時代から通院できない患者を往診してきた。「病院で待つだけではだめだ」。五年前の独立を機に、退院して自宅で療養する患者を引き受けている。がんや難病、認知症など重篤者の症状はさまざま。専門の泌尿器科にこだわってはいられない。京都市内でも特に山科区は、往診医が手薄なのだ。「医師の偏在」は肌で感じる。

正午すぎ、クッキーをかじってコーヒーで膨らませた。「何か腹に入れないと、くらくらするんで」。がっちりした体を揺すり、往診を集中させる月曜は看護師とタクシーで、それ以外の曜日は自転車を走らせる。

清水幸さん（93）は脳梗塞で寝たきりだ。胃ろうで栄養を取る。一人で介護するのは長男の幸雄さん（65）。老老介護だ。「近所の診療所が往診をしていなくて、困っていたんです」

戎井さんが往診依頼された昨春、清水さんは鼻から管で栄養を取っていた。管付きの患者はトラブルが多い。「ほかに受け手がないのか。経験がなくためらったが、挑戦する気持ちで引き受けた」と打ち明ける。

幸さんの顔をのぞき込み、戎井さんは幸雄さんに排便の具合などを尋ねる。去り際、幸雄さんに声を掛けた。「老老介護は一医療だけで解決できんけど、何でも相談してください」

住み慣れた家で暮らしたいと願う患者がいて、それを支える使命感。「患者をみとった後は、家族の懐深くに入り込めた充実もある」。でも、と音をかしげる。在宅に適さない患者が増えていると感じる。日本の医療制度の歪みを映す鏡のように。

国は一定期間を過ぎると病院に入る報酬を下げ、患者を退院させようとする。長期入院用の療養型病院はベッドを減らしている。戎井さんが入院先を探してもなかなか見つからない。「行き場がないから在宅、というはおかしい」。医療費削減の狙いしか感じない。

給付を削る一方、患者の自己負担は増え続ける。診療の前には、患者や家族の顔色を見ながら、前もって負担額を示さざるを得ない。暮らしの安心のための社会保障ではなかったか。

京都市のケースワーカーの依頼で、老夫婦を往診した。夫は心臓病、妻は認知症。身寄りもない。ある日訪ねたら、妻が「ずっと寝ているとよ」と指さす。布団の中に横たわる夫は、すでに息絶えていた。＝3面に続く

大越香江さん（右上）、豊田義貞さん（下左）、宮本保幸さん（下右）＝3面に登場

1面から続く

国は三年前から、診療報酬を上乗せする「在宅療養支援診療所」の制度を導入し、開業医の往診を誘導する。だが、山科区の開業医、戎井浩二さん（47）は制度の届け出をためらう。支援診療所になれば確かに報酬は増える。だが、その分、患者の費用負担の増加として跳ね返るからだ。

「ころころ変わる国策に乗っていいのか」。後期高齢者医療制度にも振り回された。現場の実態に合わない「医療改革」というほかない。そんな疑問を抱えながらも、目の前の患者を救いたい一心で山科を駆け回る。心の悲鳴が、思わず口をつく日だってある。「もう、一人では限界」

実態そぐわぬ改革に異議

往診のため、自転車で山科を走り回る戎井医師。自宅で暮らす患者が待っている

若手医師ら、現場から発信へ

「新臨床研修制度で、研修医に自由を与えすぎた結果、産婦人科や小児科など大変な診療科を避けるようになった。医師不足の原因ではないか」「六年間の医学部教育が実務的でなくぬるま湯すぎる。医局制度が硬直的なのも問題だ」

京都大構内の一室。大学の間に大きな壁があると感じていた。今の医療のどこに問題があるのか。どうすればいいのか。現場の医師の立場から発信していきたい」と昨年四月に会を結成した狙いを語る。

代表の大越さんは「医師と患者、現場の医療と行政

会はブログを立ち上げ、議論の内容を書き込む。医療保険制度や医師不足などテーマは多様だ。昨秋、産休明けで復職した大越さんは「今や医師試験の合格者の三分の一は女性。結婚や出産による女性医師の離職を防ぎ、復職を支援する環境作りも必要」と先ごろシンポジウムを京大で開くなど行動も始めた。「医療崩壊で困るのは患者さん。何ができるのか手探りだけど、黙っていても変わらない」

薬剤師の豊田義貞さん（33）＝同＝は昨春から、山科区で訪問での服薬指導に取り組む。病院と診療所計三カ所から薬が重複して出ている高齢者。大量の薬はごちゃ混ぜだった。医師に掛け合って処方を見直してもらった。「地域に出て、患者の暮らしを医師に伝える役割を担いたい」。

歯科医の宮本保幸さん（48）＝同＝は歯科医師会山科支部の中心になり、訪問診療などの窓口を設けた。約十人に往診を始めている。「医療者同士のつながりが、地域医療の空白を埋める」。戎井さんも自身の往診に若い開業医を同行する構想を練る。「現場を見れば、使命感を感じてくれるはずなんです。あきらめませんよ」

三十代から四十代の医療者たち。ほころんだ制度を肩に、希望の灯を手に、日本の医療のど真ん中に立つ。

＝第4部おわり

記事へのご意見、感想をお寄せ下さい　〒604－8577　京都新聞「命ときめく日に」取材班。FAXは075(252)5454　メールはkpdesk@mb.kyoto-np.co.jp